

# 感染症発生動向調査委員会報告 11月

## 今月のトピックス

インフルエンザは第45週から連続して減少していますが、この3週間で、0～4歳は増加しています。

年齢層別報告数は、第43週から5～9歳の年齢層が最も多く、約40%を占めています。

市内でのインフルエンザ入院サーベイランスの半数は5～9歳です。脳症好発年齢への注意が必要です。

今シーズンの病原体定点からのウイルス検出状況では、すべてA/H1pdmであり、季節性インフルエンザは認められていません。

冬の感染症については、大きな流行はまだ認められていません。

### 【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：88か所、内科定点：57か所、眼科定点：18か所、性感染症定点：26か所、基幹（病院）定点：3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

### 平成21年 週 - 月日対照表

第43週	10月19～25日
第44週	10月26～11月1日
第45週	11月 2～ 8日
第46週	11月 9～15日
第47週	11月16～22日

平成21年10月19日から11月22日まで（平成21年第43週から第47週まで。ただし、性感染症については平成21年10月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

### 全数把握の対象

#### < コレラ >

11月の報告数は、25日現在で1例です。渡航地はインドでした。

#### < パラチフス >

1例です。渡航地はインドでした。

#### < 細菌性赤痢 >

1例です。渡航地はインド・ネパールでした。

#### < 腸管出血性大腸菌感染症 >

3例です。今年は1月からの累計で80例の報告があり、昨年同期の63例に比べると、やや多い値です。

#### < レジオネラ症 >

1例です。感染経路は不明です。今年の累計は16例で、昨年同期の30例に比べると少なめです。

#### < 麻疹 >

1例です。予防接種歴は不明です。今年の累計は42例で、昨年同期の1479例より、著減しています。

引き続き予防接種の勧奨が必要と思われます。麻疹は平成20年1月から感染症法の5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師は届出が義務付けられています。

<http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>

#### < つつが虫病 >

1例です。全国的に、秋春に患者が報告されています。山等へのレジャーの際には、手足を露出しない、山道を逸れない等、ダニにさされないような対策が必要です。

つつが虫病についてはこちらをご参考下さい。

[http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02\\_q1/k02\\_13/k02\\_13.html](http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k02_q1/k02_13/k02_13.html)

#### <アメーバ赤痢>

3例です。全例男性です。感染経路につきましては、1例は性的接触。1例は国内不明です。1例はタイとUAE(United Arab Emirates)への渡航歴があります。

#### <ウイルス性肝炎>

急性B型肝炎が1例です。男性です。感染経路は性的接触によるものです。近年、感染後慢性化しやすいgenotypeAの割合がわが国でも増えていることが指摘されています。一旦感染し、慢性化すると、治療には相当の労力が必要です。性感染症の最大の対策は、感染予防であるとの周知が大切です。

急性B型肝炎についてはこちらをご参考下さい。<http://idsc.nih.go.jp/iasr/27/319/tpc319-j.html>

#### <後天性免疫不全症候群>

4例です。全例男性で無症候期でした。感染経路は3例が性的接触、1例は不明です。

#### <梅毒>

2例です。2例とも男性で、早期顕症Ⅱ期でした。感染経路は1例が性的接触で、1例は不明です。

性感染症は予防できる感染症です。罹患しない知識と、早期発見で早期治療のほかに、パートナーに感染させないことが大切と思われます。

性感染症についてはこちらをご参考下さい。<http://idsc.nih.go.jp/iasr/29/343/tpc343-j.html>

#### <急性脳炎>

3例が報告され、全て7歳で、女兒2人、男児1人でした。また10月に診断された脳炎の追加報告が1例あり、7歳男児でした。4例のうち、3例が新型インフルエンザによるもので、1例は原因不明です。

国内の2009年の第28週からのインフルエンザ脳症は殆どがAH1pdmによるもので、年齢中央値は、従来の季節性インフルエンザよりやや年長である8歳です。第33週にB型による脳症の報告も認められています。

<http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/idwr09week45.html>

全国の病原体検出状況でのインフルエンザの型別内訳は、こちらをご覧ください。

<http://idsc.nih.go.jp/iasr/prompt/graph/sinin1.gif>

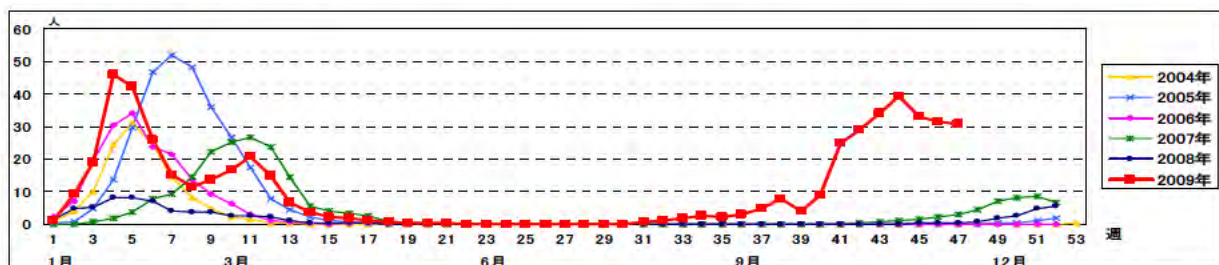
今後、インフルエンザ患者動向、型別や、重症化や耐性の遺伝子変異等の病原体情報に注意が必要です。

### 定点把握の対象

#### <インフルエンザ>

市内流行状況については、第32週(8月3日からの週)に流行の目安となる定点あたりの報告数1を超え、第44週には39.18と今シーズン最大となりましたが、第45週は32.93、第46週は31.57と、第47週は30.92と、3週続けて減少しています。過去6年間で、「定点あたり30(警報のめやす)」を超えた年が計4年ありましたが、ピークから3週後にはピーク時と比し、51%から26%まで減少しています。

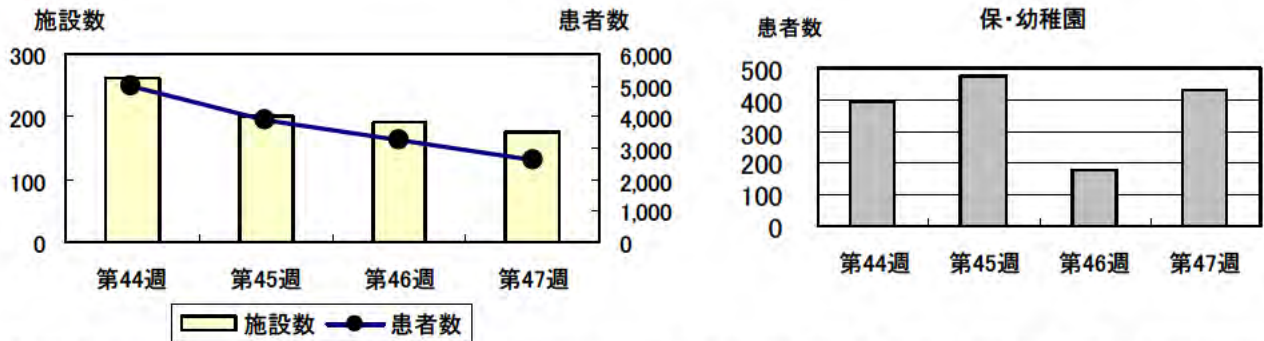
今回は過去の流行曲線とは明らかに異なり、ピークの3週間後でも80%に高止まりです。今後の再流行に注意が必要と思われます。



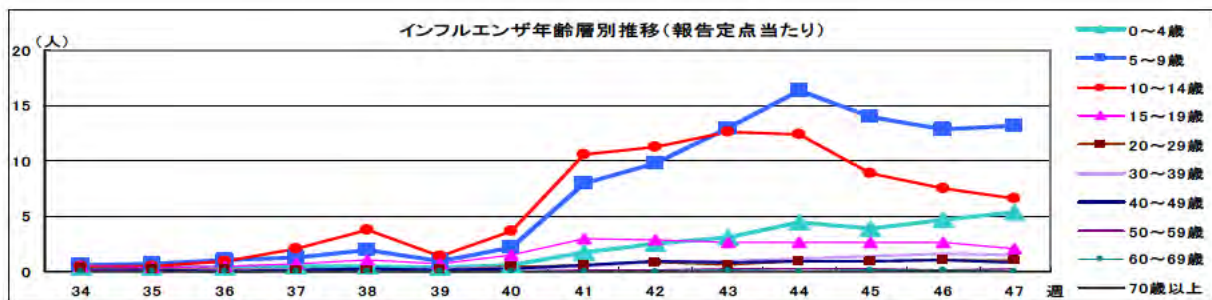
また、迅速診断キットでは、A型2885件、B型11件、AB陽性が2件でした。年齢層別では、殆どがこの3週では減少傾向にあるなか、0~4歳が上昇し、5~9歳は再上昇しています。

市内の学校等施設閉鎖報告数は、ピーク時の第44週では262施設で患者4969人でしたが、第45週では202施設3876人、第46週では190施設3227人、第47週では177施設2596人と、ピーク時と比較し、施設数では68%、患者数では52%と減少しています。但し施設閉鎖をした保育園・幼稚園の患者数は、第44週は394人でしたが、第47週では428人と増えています。同時期に中学校は、1453人が150人と著減しています。今後とも引き続き保育園・幼稚園年齢には注意が必要と思われます。

## 市内の学校等施設閉鎖報告数



全国では38.89、川崎市では27.39、東京都は24.14、横浜と川崎を除く神奈川県(以下県域)では38.82でした。



### < A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

第47週は定点あたり1.24と、やや増加しています。全国0.86、川崎市0.94、東京都0.72、県域0.83と、いずれも横浜市より低い値です。

### < 感染性胃腸炎 >

第47週は定点あたり2.71でした。全国2.85、川崎市3.67、東京都3.27、県域2.89でした。

### < 水痘 >

第47週は定点あたり0.78でした。例年冬から春にかけて報告数の増加が見られるので注意が必要です。全国1.05、川崎市0.67、東京都0.74、県域0.93でした。

### < RSウイルス感染症 >

第47週は定点あたり0.03でした。全国0.38、川崎市0.18、東京都0.24、県域0.13といずれも横浜市より高い値です。ヒトモノクロナル抗体が臨床適応された効果の可能性もありますが、インフルエンザと並ぶ冬季の重要な感染症ですので、今後の動向に注意が必要です。RSウイルス感染症についてはこちらをご参考下さい。<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/rsv1.html>

### < 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

10月は、性器クラミジアは31例(男性17例、女性14例)です。性器ヘルペスは17例(男性8例、女性9例)でした。

尖圭コンジローマは、11例のうち男性10例と、殆ど男性でした。淋菌感染症は、17例で、全て男性でした。

「感染しない」「早期発見で早期治療」「早期発見でパートナーには感染させない」等、性感染症に対する注意喚起が必要です。